

〈知的障害教育〉

## 軽度知的障害のある生徒の自己決定力を育てる

### 進路指導の工夫

——セルフアドボカシーの向上を目指す各教科等を合わせた指導の授業を通して——

沖縄県立美咲特別支援学校教諭 新 里 正太郎

#### I テーマ設定の理由

現代社会は、急速な変化の中であり、少子高齢化の進展により、将来的に大幅な労働力人口の減少が予測され、さらにIT化により、現在ある仕事の多くがAIに置き換えられるともいわれている。平成28年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申では、こうした現状を踏まえて、「変化が激しく将来の予測が困難な時代にあつてこそ、子供たちが自信を持って自分の人生を切り拓き、よりよい社会を作り出していくことができるよう、必要な力を確実に育んでいくことが期待されている」とし、「生きる力」の育成が必要であると改めて捉え直している。

さらに同答申では、「特別支援学校高等部の卒業生の一般企業等への就労が年々増加している状況を踏まえ、障害のある生徒が自立し社会参加を図るために、幼稚部段階から高等部卒業までを見据えた一貫性のある指導や支援の下、子供たち一人一人のキャリア発達を確実に促すことのできる教育を一層充実させていくことが必要である」としている。平成31年に告示された特別支援学校高等部学習指導要領において、引き続き「キャリア教育の推進」が示されており、「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」と明記されている。

国立特別支援教育総合研究所（以下「特総研」とする）の報告によると、近年、特別支援学校における知的障害のある児童生徒が増加しており、なかでも高等部の増加の割合が一番高く、障害の軽度の生徒に加えて知的発達の程度が境界線級である生徒の増加を指摘している。このような状況を踏まえて、沖縄県では、軽度の知的障害のある生徒に対する教育を行う高等部のみを設置する学校（以下『高等特別支援学校』という）を5校設置し、教育環境の整備を進めてきた。現在、県内の高等特別支援学校の入学定員は合計して105名となっており、令和2年度の志願者数は181名であった。倍率は1.72倍と県立高校よりも高い割合となっていることから、社会の特別支援教育や障害に対する理解が深まり、ニーズが高いことが伺える。

美咲特別支援学校（以下「本校」とする）は本島中部に位置する知的障害単一の特別支援学校である。本校高等部の生徒数も増加傾向にあり、生徒数は146名と県内最多である。「個々の実態や適性に応じた自立と社会参加・貢献ができる幼児児童生徒の育成」を教育目標とし、高等部を卒業後の進路としては、サービス業や飲食業といった一般企業への就職から、障害福祉サービス事業所への入所などがある。令和2年度の入学生は58名で、そのうち地域の中学校から入学した生徒は29名で50%となっている。これは、前述したように、特別支援教育と障害に対する理解が深まり、多様な進路選択のひとつとして本校を選択する生徒が増えた結果であると同時に、一部には、高等特別支援学校に入学できなかった生徒が、本校に入学している結果と考えられる。校区内中学校から入学した生徒の中には、本校に入学したことへの戸惑いや大きな環境の変化についていけず、学習意欲が上がらず、目標もないまま学校生活を送る生徒がおり、中には不登校傾向になる生徒もいる状況である。

しかし、これまでには、同様な体験をしながらも、学校生活に意欲的に取り組み、一般就労を実現させた卒業生も存在する。彼らに共通している点は、入学後、自分自身でやりたいことを見つけ、そ

れを自分自身で決定し実行していったことである。このことから、「自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択する力」を計画的に育成する指導の工夫が必要であると考え。

本研究では、本校1学年の学習グループA・Bを対象に、今年度から導入された沖縄県版「キャリア・パスポート」を活用し、「各教科等を合わせた指導」であるキャリアスタディの授業を中心に、自分自身の長所と短所に気づき、苦手なことに対し、自ら声を上げて支援を求め、やりたいことを自ら主張できるセルフアドボカシースキルの獲得を目指す。そして、卒業までの不安を解消するために進路決定までの過程を明確にすることで、身につけた自己決定力を生かしながら、目標を持ち、生き生きとした学校生活を送ることができるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 沖縄県版「キャリア・パスポート」を活用し、自分自身の長所と短所を知る学習を重ねることで、セルフアドボカシースキルと自己決定力が身につくであろう。
- 2 キャリアスタディの授業を活用し、進路決定までの過程を「見える化」することで、希望する進路を自己決定し、目標に向かって意欲的・主体的に授業に取り組むことができるであろう。

## II 研究内容

### 1 軽度知的障害のある生徒の実態

平成25年の文科初第756号初等中等教育局長通知によると、知的障害特別支援学級の対象は「知的発達の遅滞があり、他人との意思疎通に軽度の困難があり日常生活を営むのに一部援助が必要で、社会生活への適応が困難である程度のも」と示されている。その状態像として文部科学省教育支援資料（2013）によると、「他人との日常生活に使われる言葉を活用しての会話はほぼ可能」であり「家庭生活や学校生活におけるその年齢段階に標準的に求められる食事、衣服の着脱、排せつ、簡単な片付け、身のまわりの道具の活用などにほとんど支障がない程度」と表現されている。学習上の特性（表1）としては、「学習によって得た知識や技能が偏ったり、断片的になりやすく」なることがあるため、習得した知識や技能が実際に生活には応用されにくい傾向がある。ほかにも「抽象的な概念の理解や想像すること」や「判断・応用すること」が課題となっている。そのため、生徒が見通しをもって行動できるような環境の工夫、生活に結び付いた具体的な活動を学習活動の中心に据えた、実際の状況下での指導などの教育対応が基本とされる。

表1 知的障害のある児童生徒の特性と必要な指導

学習上の特性	必要な指導
知識・技能が偏る、断片的になる	日課や学習環境などをわかりやすく工夫
知識や技能が実生活に適応されにくい	生活に結び付いた具体的な活動
抽象的な概念、想像することが困難	実際の状況下での指導

### 2 沖縄県の特別支援学校高等部に在籍する生徒の現状

県内の知的障害を主とする特別支援学校高等部へ在籍生徒に関するアンケート調査を行った（表2）。全校生徒のうち各校区内中学校からの入学生は、各特別支援学校全体の半数近く在籍しており、その多くは、軽度知的障害のある生徒であると推測される。これは、各特別支援学校高等部において、中重度の知的障害の教育に加えて、軽度知的障害のある生徒に対応したキャリア教育の整備が必要になってきていると考えられる。

表2 県内の知的障害を主とする特別支援学校高等部の在籍生徒に関するアンケート調査

	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校
高等部生徒数	73人	146人	46人	122人	123人	62人	31人	30人
中学校からの入学者数	47人	67人	18人	53人	54人	21人	21人	17人
全体に占める割合	64%	46%	39%	43%	44%	44%	68%	57%

### 3 軽度知的障害のある児童生徒に対するキャリア教育

#### (1) 「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」へ

平成23年の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の答申で、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、これまでの「4領域8能力」を補強した「基礎的・汎用的能力」を示した(図1)。これは、4つの能力によって構成されており、「それぞれが独立したものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない」としている。

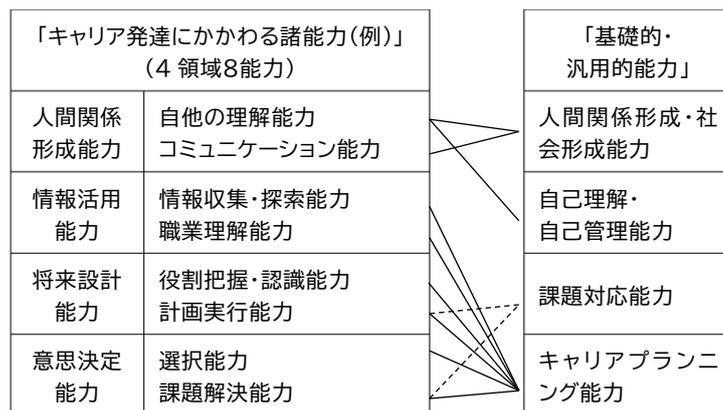


図1 「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」の関係

これは、4つの能力によって構成されており、「それぞれが独立したものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない」としている。湯浅恭正(2011)は、「自己決定に必要なのは、豊富な情報や体験をもち、それを活用することである」こと、「キャリア形成に必要な力を支えているのは『人間関係』である」と述べていることから、「4領域8能力」を補強した「基礎的・汎用的能力」の育成は、将来、社会的自立を目指す特別支援学校高等部の生徒にとっても重要な力である。

#### (2) 知的障害のある児童生徒の「育てたい力」

特総研(2010)の「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』」では、これまでの4領域から、「高等部段階において育てたい力」として、16の力を挙げている。この力は「児童生徒のできる・できないについて評価するためのものではなく、児童生徒がキャリア発達を促すための基盤となる要素として指導者が意識し、共有すべきものとして作成している」ことに留意する必要がある。この16の力を「基礎的・汎用的能力」と関連付けた授業づくりが必要であると考え(表3)。

表3 「基礎的・汎用的能力」と「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』高等部段階において育てたい力」との関連付け

「基礎的・汎用的能力」	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』高等部段階において育てたい力」	・協力・協同 ・意思表示 ・場に応じた言動 ・法や制度の活用	・自己理解・自己管理 ・習慣形成 ・やりがい ・肯定的な自己評価	・消費生活の理解 ・夢や希望 ・自己調整	・情報収集と活用 ・役割の理解と働くことの意義 ・進路計画 ・目標設定 ・自己選択(決定・責任)

### 4 「キャリア・パスポート」

平成31年に特別支援学校高等部学習指導要領が告示され、キャリア教育の一層の充実を図ることが明記されたことから、本県においても「キャリア教育の基本的方針」が示され、そのひとつとして今年度より「キャリア・パスポート」が導入された。この「キャリア・パスポート」では児童生徒が、小学校から高等学校(特別支援学校高等部)までのキャリア教育に関わる諸活動について、学級(ホームルーム)活動を中心として、各教科等と往還しながら、自分自身の学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりしながら、自分の変容や成長を自己評価できるように工夫されている。

特別支援学校においては、従来から作成している「個別の教育支援計画」や「個別の指導計

画」が本人や保護者の願いや学びの履歴、合理的配慮の提供など、将来を見据えた内容が十分に含まれていることに留意して、児童生徒にわかりやすく、学習で活用しやすい様式に変更するなどの工夫をすることとしている。本校でも今年度からの導入に伴い、研修

図2 県教育委員会のワークシートと本校向けのワークシート

部を中心に各学部にて内容の検討が行われている状況である。

本研究では、沖縄県教育委員会が示すワークシートを参考に、本校の軽度知的障害のある生徒に向けた内容にアレンジをして活用することとした（図2）。

### 5 セルフアドボカシー

日本語では、「自己権利擁護」と訳され、障害や困難を抱えている人が、自分自身の利益や欲求、意思、権利を自ら主張することを意味している。片岡美華・小島道生（2017）は「セルフアドボカシーを行うための力を特に『セルフアドボカシースキル（自己権利擁護力）』といい、（中略）自分の状態を自分で説明できる力（他者への理解を促す力）と自分が必要とする支援を他者に求められる力のおおよそ2つの力である」と説明している。また、平成19年の文部科学省による「特別支援教育の推進（通知）」で、特別支援教育の理念には「自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、（中略）持てる力を高め、適切な指導及び必要な支援を行う」とあることから「セルフアドボカシーと直結している」と加えている。

特別支援学校学習指導要領においても、自立活動の内容に「3人間関係の形成（3）自己の理解と行動の調整に関すること」や、「6コミュニケーション」などが関連付けられることからセルフアドボカシースキルを身につける取り組みは、特別支援教育では必要であると考えられる（表4）。

表4 セルフアドボカシーと関連づけられる内容

自立活動の内容	3 人間関係の形成 (3)自己の理解と調整に関すること 6 コミュニケーション
個別の指導計画の作成と内容の取扱い (3)具体的な内容を設定する際の留意点	Ⅰ 個々の児童又は生徒が、活動しやすいように自ら環境を整えたり、必要に応じて周囲の人に支援を求めたりすることができるような指導内容も計画的に取り上げること。

## Ⅲ 研究の実際

### 1 対象生徒について

検証授業は1学年のI課程（軽度知的障害）に相当する学習グループA・B（男子14名・女子8名）で、全員が地域の中学校からの入学生である。指示をよく理解し、活動に取り組むことができるが、積極的な発言をする生徒は一部で、場面緘黙のある生徒や登校してはいるが教室に入ることができない生徒、不登校傾向にある生徒などが在籍している。

事前アンケートには、22名中17名が回答している。その結果によると、13名が「希望して入学した」と回答し（図3）、その理由には、「将来の就労を意識して入学している」生徒がいる一方で（図4）、「学校を辞めたいと思ったことがあるか」との質問に「よくある」「たまにある」と回答した生徒が9名いた（図5）。「やめたい」ことを家族に相談したことがあるか、と質問したところ、8名が「ない」と回答している（図6）。これらのことから、中学校特別支援学級から本校へ入学した生徒の不安や葛藤が垣間見える。これは、進学した理由にも表れており、「特に

理由はない」と回答している生徒が6名、「家族や先生からすすめられた」生徒が4名おり（図4）、希望して入学したが、目的意識を持って学校生活を送ることができていない生徒も存在していることが推測される。

また、軽度知的障害の特性である「意思疎通の困難さ」と「社会生活への適応の困難さ」による人間関係のつまずきやコミュニケーションが十分に図れないことから、自己肯定感、自己決定の力が十分に備わっていないという課題も予測され、キャリア教育の4つの能力の育成が求められる。

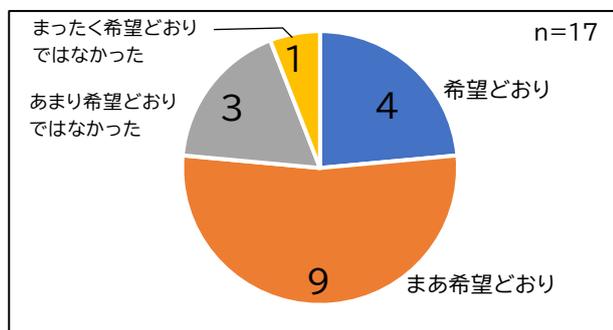


図3 本校への入学希望

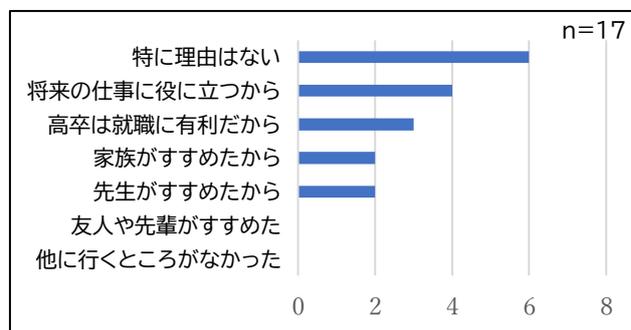


図4 本校に進学した理由

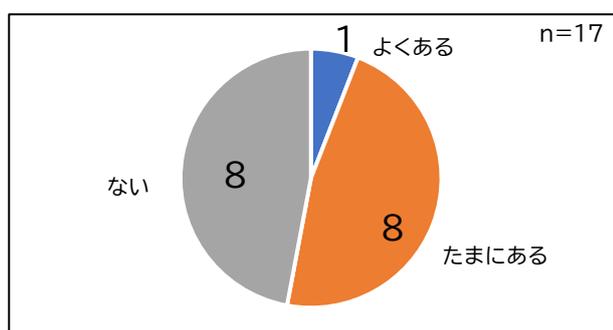


図5 本校を「やめたい」と思った経験

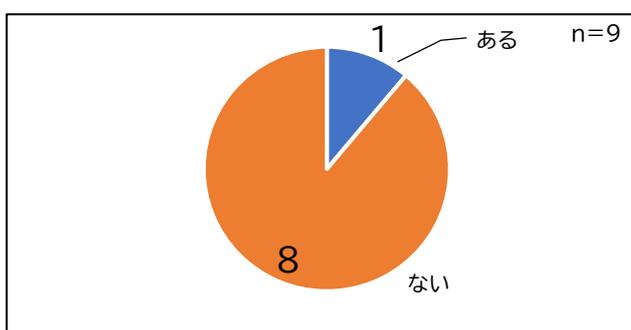


図6 「やめたい」ことを誰かに相談した経験

## 2 本研究におけるキャリアスタディの内容

本校では、今年度より、「各教科等を合わせた指導」として「キャリアスタディ」を設定した。「各教科の目標を捉えて必要に応じて設定し適切に指導する」ことを目標とし、職業の内容を中心に「特別支援学校技能検定に向けた実技指導」や支援部による「アンガーマネジメント」についての学習などを行っているが、新入生に対しては、学校生活に前向きに取り組む姿勢を身につける指導内容の検討が必要であると感じた。前川（2015）は「軽度知的障害のある生徒を対象にした沖縄高等特別支援学校で行っているキャリアガイダンスは『道徳、自立活動、特別活動、職業のねらいや内容を中心とした各教科等合わせた指導』であり、就労と自立に向けて生徒の意識を高めることをねらいとして行っている」としている。本研究でも、同様に、特別支援学校高等部学習指導要領（2019）に示されている特別活動、道徳、自立活動に共通している内容を検討し、キャリア教育と関連付けて、本校に適した内容を行う必要があると考える（表5）。

表5 特別活動、道徳、自立活動に共通する本研究での目標と内容（特別支援学校高等部学習指導要領による）

特別活動の目標から選定	道徳の内容から選定	自立活動の目標から選定
(3)自主的, 実践的な集団活動を通して身につけたことを生かして, 主体的に集団や社会に参画し, 生活及び人間関係をよりよく形成するとともに, 人間としての在り方生き方についての自覚を深め, 自己実現を図ろうとする態度を養う。	A 主として自分自身に関すること B 主として人との関わりに関すること	2 心理的な安定 (2)状況の理解と変化への対応に関すること。 3 人間関係の形成 (1)他者とのかかわりの基礎に関すること。 (3)自己の理解と行動の調整に関すること。

### 3 指導計画

自己決定力を身につけるためには、キャリア教育で育成すべき能力の「基礎的・汎用的能力」の育成が必要であると考え、第1時から第5時までは、「自己理解・自己管理能力」を高める取り組みとして、生徒自身が現在の状況を振り返り、自分自身について考える活動を中心に行った。そして、セルフアドボカシースキルについて考える学習を加えることで、「人間関係形成・社会形成能力」を扱うこととした。第6時から第8時までは、現在、企業で就労にあたっている卒業生、福祉サービスを利用している卒業生とコミュニケーションをとることで、「人間関係形成・社会形成能力」に加えて、将来について考える「キャリアプランニング能力」の育成に取り組むこととした(表6)。

表6 授業計画

時	題材	学習内容	取り扱う「基礎的・汎用的能力」	授業に共通する目標と内容
1	オリエンテーション キャリア・パスポートをつくらう	4つの基礎的・汎用的能力を説明。のばしたい力をそれぞれの領域から選択する。	・自己理解・自己管理能力	特別活動(3) 道徳A 自立活動3(3)
2	学校の目標を確認しよう 3年間の学校行事予定を確認する。	本校の学校目標と目指す生徒像を確認する。見通しをもって学校生活をすすため3年間の行事予定表を作成し、卒業後の進路先について学習する。	・キャリアプランニング能力 ・課題対応能力	特別活動(3) 道徳A 自立活動2(2)
3	自己理解と他者理解 自分データの作成とちょこっとチャット	「好きな教科」「好きな色」など自分に関する質問に回答し、自己理解を促す。質問項目をカードにし、グループごとにカードをめくり発表する。	・自己理解・自己管理能力 ・人間関係形成・社会形成能力	特別活動(3) 道徳A・B 自立活動3(1)
4	自分の性格・タイプを知ろう 「セルフアドボカシー」ってなに	「積極的⇔ひかえめ」「おおざっぱ⇔ていねい」など自分自身の性格やタイプについて考え、自己理解を促す。セルフアドボカシーについて説明し、ある特性を補うための方法についてグループで検討する。	・自己理解・自己管理能力 ・人間関係形成・社会形成能力	特別活動(3) 道徳A・B 自立活動3(1)(3)
5	【検証授業①】 セルフアドボカシーの実践 自分の特性を理解し、それを補う手立てを考える。	自分自身の苦手なことを項目の中から選択、または自分自身で考え、それを補うための方法についてグループで話し合う。SSTを行い、実践をする。	・自己理解・自己管理能力 ・人間関係形成・社会形成能力	特別活動(3) 道徳A・B 自立活動3(1)(3)
6	先輩との座談会① 先輩への質問を考えよう	座談会に参加する卒業生の高校での活動と現在の状況を紹介し、聞きたいことを考えて、グループ内で共有する。	・課題対応能力 ・人間関係形成・社会形成能力	特別活動(3) 道徳B 自立活動3(1)
7	【検証授業②】 先輩との座談会② 先輩へ質問をしよう	卒業生と交流を行う。事前に検討した質問をする。高校生活に必要な気持ちや態度を聞くことで、今後の学校生活へ生かすことができる。	・人間関係形成・社会形成能力 ・キャリアプランニング能力	特別活動(3) 道徳A・B 自立活動3(1)(3)
8	先輩との座談会③ 先輩の話を共有しよう	前時の動画を鑑賞し、共有したい質問と回答を確認する。卒業生の回答を受けて、今後の学校生活にどう取り組めばよいかを考える。	・自己理解・自己管理能力 ・キャリアプランニング能力	特別活動(3) 道徳A・B 自立活動3(1)(3)

### 4 指導における工夫

#### (1) グループ学習

授業への参加を第一に考え、ワークシートへの記入を強制せず白紙でもいいことを説明し、安心感を与えるように配慮した。自己理解や他者理解を促すために、隣の生徒と相談しながら意見が交換できる場面を多く設定した。グループ編成については、女子が少ないためひとつのグループとし、男子は2グループにして、発言の多い生徒と少ない生徒を均等に振り分けて、発言を強要しないようにし、意見を伝えることが苦手な生徒でも安心できるように配慮した。

#### (2) 特性への配慮

「キャリア・パスポート」を活用するにあたり、沖縄県教育委員会が示したワークシートを生徒が理解しやすい文言に変更し、イラストを掲載するなどして、内容を簡略化した。また、

それぞれの学習上の特性に配慮して以下の点で教材・教具の工夫を行うこととした。

- ① 興味・関心を持って積極的に授業に参加できるよう、導入には、「間違いさがし」や「だまし絵」、iPadを活用したクイズ形式の問題を取り入れる（図7）。
- ② 授業の進行と語句の説明を視覚化するためにパワーポイントを使用する（図8）。
- ③ 生徒が発言しやすいように自己理解に関する質問事項とトーキングゲームで使用するカードの内容を同一にする（図9）。
- ④ 生徒が授業のねらいを理解しやすいように、すべての時間に確認する「基礎的・汎用的能力の内容を簡略化して提示する（表7）。



図7 学習ソフト「Plickers」



図8 内容の視覚化

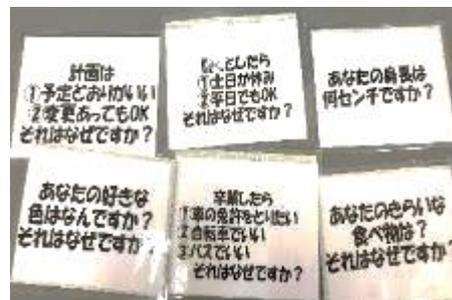


図9 質問事項のトーキングゲーム

表7 基礎的・汎用的能力を簡略化した内容

基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
	人とかかわる力	ふりかえる力	やりぬく力	みとおす力
簡略化した内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手のことを理解する力</li> <li>・相手と一緒に活動する力</li> <li>・コミュニケーションの力</li> <li>・みんなと協力する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の役割を理解する力</li> <li>・いつでも前向きに考える力</li> <li>・イライラをコントロールする力</li> <li>・自分で考え、行動する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で計画をたてる力</li> <li>・自分で課題をみつける力</li> <li>・課題の原因をしらべる力</li> <li>・計画したことを実行する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の将来を考える力</li> <li>・勉強することの意味を理解する力</li> <li>・働くことの意味を理解する力</li> <li>・自分で決定する力</li> </ul>

## 5 授業の実際

### (1) 検証授業①【令和2年11月19日実施】

① 単元名「セルフアドボカシーの力を身につけよう」

② 単元の目標

- ア 自分のできること・できないことを知ることで自己理解を深めることができる。
- イ 自分の思いを伝えるコミュニケーションの大切さに気づくことができる。
- ウ 他者の意見を聞く態度を身につけることができる。

### (2) 授業の概要

これまでに「キャリア・パスポート」についての説明を行い、自己理解と他者理解についての取り組みを行った。第3時では「好きな色は何」といった自分についての質問に回答し、同様の質問事項をカードにし、トーキングゲームを行い、コミュニケーション力と他者理解について取り組んだ。第4時では自己理解を深めるために、自分の特性について考え、事例をもとに、苦手とすることを他者へ伝えて理解を求めるセルフアドボカシースキルについての学習を行った。

本時では、自分自身の苦手なことをどう他者へ伝えて理解を促してもらうのかをグループ内で話し合いながら検討し、発表する学習を行った。学習したワークシートは全て「キャリア・パスポート」にファイルし、振り返りが行えるようにした。

### (3) 検証と考察

検証前に行った「自分の得意なことと苦手なことについてのアンケート」の回答を全体で共有し、クラスメイトにもそれぞれ得意なこと苦手なことがあることを知った。そして、あら

ためて自分自身の得意なことと苦手なことについて考える時間を設定した。事前アンケートの項目やその他の特性等を具体的に提示することで自分自身で選択できるよう工夫を行った。

前時で、苦手とすることを他者へ伝えて理解を求める工夫について、グループ学習を行ったことで、自分自身が必要とする手立てを記入することができた。(図10)。まとめとして、ロールプレイを行い、声にだして発表することができた。

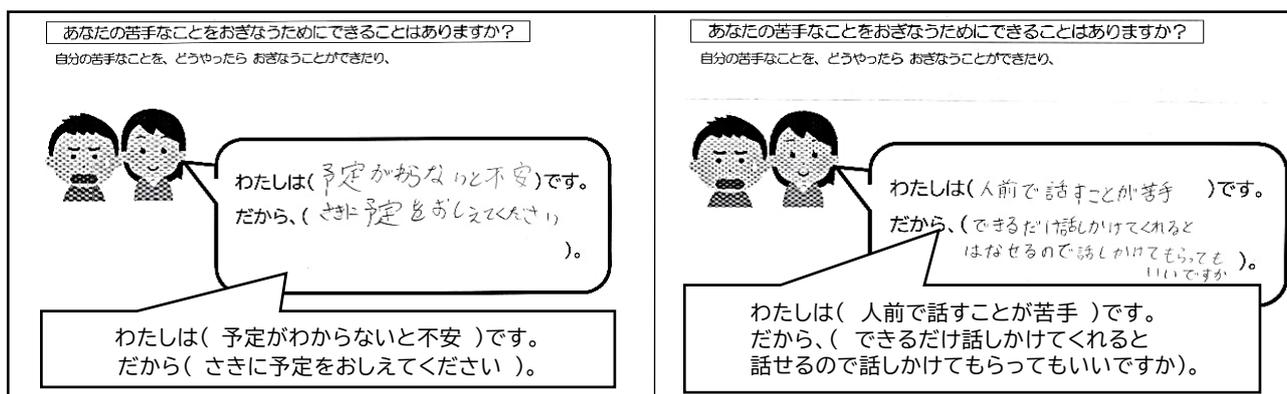


図 10 生徒が検討した自分の苦手な部分を補う手立て

#### (4) 検証授業②【令和2年12月18日】

① 単元名「先輩から、学校生活について聞いてみよう」

② 単元の目標

- ア 卒業生の話を聞いて、これからの学校生活の参考として生かすことができる
- イ 自分の聞きたいことを伝えるコミュニケーションの力を身につけることができる。
- ウ 他者の意見を聞く態度を身につけることができる。

#### (5) 授業の概要

第6時から第8時までは、卒業生との交流を行い、卒業生が体験したことや感じたことを共有し、これからの学校生活に生かすことで、意欲的・主体的な態度を身につける取り組みとした。第6時で、「先輩に聞きたいこと」をブレインストーミング形式で話し合いを行い、質問事項をまとめた(図11)。

本時では、この質問事項を卒業生に質問し、コミュニケーション力を身につける取り組みを行った(図12)。まとめとして、全体で共有しておきたい回答を発表し、学校生活や進路決定に必要なことの確認を行った(図13)。



図 11 ブレインストーミング



図 12 卒業生との交流の様子



図 13 回答を共有する

#### (6) 検証と考察

第6時に、来校する卒業生の顔写真や現在の状況などの情報を事前に共有したことで、落ち着いて授業に臨むことができた。各グループでは、できるだけ一人一問だけでも先輩に質問するよう促しを行ったが、質問することができない生徒も見られた。それでも、卒業生から質問される場面があり、それに対し回答する姿が見られた。女子のグループでは、前時で検討した質問を丁寧に問いかける姿が見られたことから、コミュニケーションの力が身につけていると感じた。進路先についての質問も多く、就職後の体験談や離職した理由、なぜその職種に決めたのかを聞くことで、卒業後について深く考えることができた。課題としては、

グループが3つになったことで、質問の回答をわかりやすく説明するといった、教師からの支援が必要な場面に対応することができず、活発に話し合いができなかったグループがあった。こまめな机間巡視と各グループに対応できるよう教師の人員数を検討する必要がある。

#### IV 仮説の検証

##### 1 セルフアドボカシースキルの獲得と自己決定力の向上

キャリアスタディを始めた当初は、道徳的な内容に困惑する姿も見られたが、授業を重ねるにつれて、積極的に発言したり、グループでの活動が次第に活発になるなど、前向きに取り組むようになった。自己理解を促すワークを繰り返すことで、自分自身の特性と向き合うことができたことと、他者の発表を聞くことで、自分とは違う特性を理解することができた。

検証授業終了後のアンケートでは、「セルフアドボカシーという言葉の意味がわかる」という生徒は少ない結果となったが(図14)、「自分の苦手なことを相手に伝える力が身についたか」という質問には11名が「伝える力がついた」と回答していることからセルフアドボカシースキルを獲得できた生徒が増えたと考えることができる(図15)。今後も継続して学習を重ねるとともに、学習活動全体をとおして、獲得したスキルを活用する場面を設定することが必要である。

「苦手なことを伝える力がついたと思わない」と回答した生徒に対しては、原因を個別に探りながら、指導内容を検討していく。

自己決定力の向上については、7月と11月の三者面談での進路調査をもとに検討を行った。7月の調査で、「Youtuber」や「空欄」、「考え中」などの回答が多かったが、今回の検証授業や進路学習などを重ねた結果、ほとんどの生徒が、具体的な進路先、または業種を希望することができるようになった(表8)。生徒へ聞き取りを行うと、当初は一般就労を希望していたが、11月

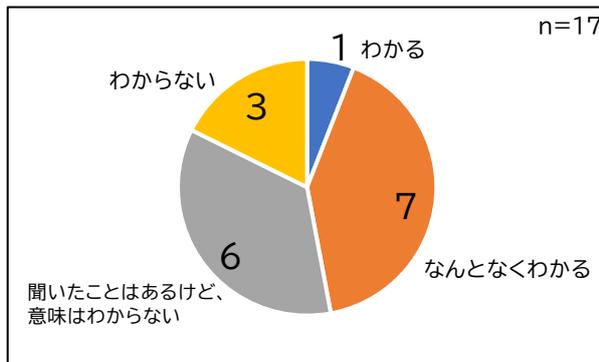


図14 「セルフアドボカシー」の理解

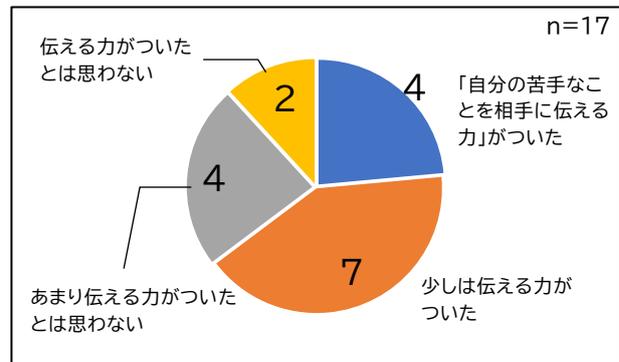


図15 セルフアドボカシースキルの向上

表8 対象生徒の進路希望調査

生徒	7月進路調査	11月進路調査	生徒	7月進路調査	11月進路調査
A 男	空欄	ザ・ビッグ	L 男	考え中	保育園
B 男	youtuber	お店の品出し	M 女	ペット関係	ペット関係
C 男	空欄	空欄(未面談)	N 女	空欄	かねひで
D 女	スーパー品出し	Fun ラボ(就労移行*1)	O 男	youtuber	料理・お菓子作り
E 男	大工関係	与勝鉱産(B型*2)	P 男	パソコン関係	サンエー・かねひで
F 男	エディオン	エディオン	Q 男	寿司屋	プラス(A型)
G 男	一般就労	一般就労	R 女	空欄	品出し
H 女	まだわからない	プラス(A型*3)	S 女	農業・スーパー	ホテル・スーパー
I 女	空欄	空欄(未面談)	T 男	未定	清掃業
J 女	考え中	保育園	U 男	空欄	スーパー品出し
K 男	動物関係	動物関係	V 女	空欄	ルーチェ(B型)

\*1 就労移行支援事業所 \*2 就労継続支援 B 型事業所 \*3 就労継続支援 A 型事業所

の調査では、「すぐに働くよりは訓練をしてから働きたい」と訓練等福祉サービスに変更するといった、自分自身の状況を理解した進路の選択を検討している意見も聞かれた。このことから、自己決定力に加えて、自己理解の力も向上していると考える。

## 2 意欲的・主体的に授業に向かう姿勢

第2時から第3時では、高校生活の流れから卒業後の進路先を可視化することに留意した(図16)。第6時の「卒業生との座談会」の事前学習において、卒業生の現状を、第2時で可視化した進路先と照らし合わせて確認することで、理解を深めることができた。

卒業生との交流では、これまでの講話形式から、小グループを設定した。一人一人が質問をしやすくなったことで、積極的に話しかけることができた。振り返りでの感想も学校生活に対し、「チャレンジしてみようと思った」と前向きな意見があった(表9)。個々の生徒の変容の例として、検証当初のアンケートで、学校生活について「あまり楽しくない」と回答していた生徒Dは、生徒会役員に立候補し、多くの生徒の前で自分自身をアピールすることができた。



図16 3年間の流れと進路先の「見える化」  
表9 先輩との座談会の生徒感想(抜粋)

先輩にしつもんしたなかで、そらと※さんの仕事についてがいちばんいんしょうにのこりました。(中略)先輩から聞いたしつもんはこれからいかにしていこうとおもいます。 ※「そらと」 就労継続B型事業所
〇〇さんの話をきいて、〇〇さんはなにごとにもちゃれんじしているなっていうところに私はとってもいいなと思いました。(中略)私も〇〇さんみたいにチャレンジしてみようと思いました。
社会に出たらいろいろときびしいと言ったことを実感することができました。

さらに、職業の授業では、クラスメイトのリトルティチャーとして、他の生徒の支援を自発的に申し出ることができた。担当教諭からは、校内実習や研究授業を経験したことで、就労を意識し、挨拶や丁寧な言葉づかいができるようになり、学校生活に対し、意欲的な姿勢が見られるようになったとの声があった。

今後は「キャリア・パスポート」の内容を精査し、各学年に必要なねらいを検討、改善を重ねながら、学校全体として系統的に取り組めるように計画をたてる必要がある。

## V 成果と今後の課題

### 1 成果

- (1) 軽度知的障害のある生徒に対する各教科等を合わせた指導であるキャリアスタディの授業プログラムを作成することができた。
- (2) 「人間関係形成・社会形成能力」と「自己理解・自己管理能力」を身につけることができたことで、セルフアドボカシースキルを向上させることができた。
- (3) 卒業生との交流のあり方を工夫することで、学校生活に向かう姿勢が前向きになり、様々な活動に、主体的・意欲的に取り組む姿勢が見られた。そして、希望する進路を自己決定することができた。

### 2 課題

- (1) 「自己理解・自己管理能力」を深め、セルフアドボカシースキルの定着を図る指導の継続。
- (2) キャリアスタディで取り上げた内容を各教科と連携し、学習活動全体をとおして、「基礎的・汎用的能力」の育成を目指した指導内容の検討。
- (3) 授業内容の理解を深める指導方法の検討と、個に応じた丁寧な指導・支援の継続。
- (4) 不登校や教室に入ることができずに授業に参加することができなかった生徒に対し、学年会、特別支援部、進路指導部と連携した支援方法の検討。

## 〈参考文献〉

- 沖縄県教育委員会 2020 『沖縄県キャリア教育の基本方針』
- 文部科学省 2019 『特別支援学校高等部学習指導要領(平成31年告示)』
- 片岡美華・小島道生 2017 『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー』 金子書房
- 前川孝治 2015 『軽度知的障害のある生徒に対するキャリア教育の工夫』 沖縄県立総合教育センター 第57集 研究収録
- 渡辺明広 2014 『軽度の知的障害のある生徒の就労を目指した青年期教育』 黎明書房
- 湯浅恭正 2011 『発達障害児のキャリア発達形成と授業づくり・学級づくり』 黎明書房
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2010 『特別支援学校(知的障害)高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究』
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2010 『知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究』
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2010 『知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究』

## 〈参考WEBサイト〉

- 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm) (最終閲覧2021年2月)
- 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (最終閲覧2021年2月)
- 文部科学省「特別教育支援資料～障害のある子供の就学手続と早期からの一貫した支援の充実～」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1340250.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340250.htm) (最終閲覧2021年2月)
- 文部科学省「特別支援教育の推進について(通知)」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1300904.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1300904.htm) (最終閲覧2021年2月)
- 文部科学省「障害のある児童生徒等に対する早期からの一貫した支援について(通知)」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1340331.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340331.htm) (最終閲覧2021年1月)
- 沖縄県教育委員会 沖縄県版「キャリア・パスポート」  
[https://www.pref.okinawa.jp/edu/kenritsu/career\\_passport/index.html](https://www.pref.okinawa.jp/edu/kenritsu/career_passport/index.html) (最終閲覧2020年12月)
- 沖縄県教育委員会県立特別支援学校編成整備計画(平成24年度～平成33年度)平成24年3月  
[http://www.pref.okinawa.lg.jp/edu/somu/jujitsu/gakkozukuri/hense/documents/27\\_henseiseibikeikaku.pdf](http://www.pref.okinawa.lg.jp/edu/somu/jujitsu/gakkozukuri/hense/documents/27_henseiseibikeikaku.pdf)  
(最終閲覧2020年12月)
- セルフアドボカシーとは 発達障害の方向けの知識とアドバイス 監修:宮尾益知(医学博士)  
<https://www.kaien-lab.com/faq/1-faq-developmental-disorders/selfadvocacy/> (最終閲覧2020年12月)